**聖霊降臨節第18主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 2024年9月15日**

**「本物と偽物」**

**出エジプト記32章1～6節**

 **32:1 モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」と言うと、**

 **32:2 アロンは彼らに言った。「あなたたちの妻、息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、わたしのところに持って来なさい。」**

 **32:3 民は全員、着けていた金の耳輪をはずし、アロンのところに持って来た。**

 **32:4 彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鋳像を造った。すると彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言った。**

 **32:5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築き、「明日、主の祭りを行う」と宣言した。**

 **32:6 彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物をささげ、和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた。**

**使徒言行録19章11～20節**

**19:11 神は、パウロの手を通して目覚ましい奇跡を行われた。**

 **19:12 彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを持って行って病人に当てると、病気はいやされ、悪霊どもも出て行くほどであった。**

 **19:13 ところが、各地を巡り歩くユダヤ人の祈祷師たちの中にも、悪霊どもに取りつかれている人々に向かい、試みに、主イエスの名を唱えて、「パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる」と言う者があった。**

 **19:14 ユダヤ人の祭司長スケワという者の七人の息子たちがこんなことをしていた。**

 **19:15 悪霊は彼らに言い返した。「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ。」**

 **19:16 そして、悪霊に取りつかれている男が、この祈祷師たちに飛びかかって押さえつけ、ひどい目に遭わせたので、彼らは裸にされ、傷つけられて、その家から逃げ出した。**

 **19:17 このことがエフェソに住むユダヤ人やギリシア人すべてに知れ渡ったので、人々は皆恐れを抱き、主イエスの名は大いにあがめられるようになった。**

 **19:18 信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。**

 **19:19 また、魔術を行っていた多くの者も、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を見積もってみると、銀貨五万枚にもなった。**

 **19:20 このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった。**

1.

**「学ぶことは真似ること」と昔から言われています。学ぶということは真似をすることから始まるというのです。職人でも芸事においても先生や師匠の技を見て盗む、つまり真似をすることが大切であると言われます。そのような世界に身を置いていなくても、私たちが小学校の時に習字の時間があったと思いますが、その時にはお手本となる字を横に置いてその字を真似て書いたと思います。あるいはお手本の字の上に半紙を置いてその上をなぞって止めたりはねたり力の入れ具合とかを身に着けたと思います。お手本の字を真似ることで字を覚えていくのです。マネは真似、単なる模倣であって本物ではないのかもしれませんが、職人業も芸事も字を覚えるのもそうですが、真似を重ねていき学びを重ねていく中で、その人なりの技が身についていくのです。そしてその身についた技をやがてお弟子さんたちが真似をしてその業が受け継がれていくのです。上手くなりたい、身に着けたい、その思いでもって真似をすることが真似事、模倣であっても、いわば最初は単なる偽物であったものがそれがやがて本物になっていくということができるのです。**

**今日の聖書箇所にはそのような真似をした人たちが出てきます。エフェソの町において各地を巡り歩くユダヤ人祈祷師たち、この祈祷師たちとは悪霊追放者とも訳せる人たちですが、ユダヤ人祭司長スケワの7人の息子たちがそうです。この当時は病気は悪霊の仕業だと考えられていました。彼らは病気の人から悪霊を追い出してお金儲をもらってそれで生計を立てていました。今日の個所の後半部分を読みますと、彼らが悔い改めてイエス様を信じる信仰に入った時に悪霊追放に使っていた魔術書を持って来て皆の前で焼き捨てた。値段は銀貨5万枚にもなったと記されています。銀貨1枚が当時の労働者の一日分の賃金と言われています。それが5万枚です。仮に1日1万円と考えますと、5億円というとんでもない金額になります。それだけの魔術書を買えるくらいのお金を持っていたのですから、悪霊追放というのは相当もうかる仕事だったのでしょう。**

**その祈祷師たちがパウロの奇跡の業を聞いたのでしょう。「どうもパウロという伝道者はイエスの名によって奇跡を行っている。ここは一つ我々もイエスの名によって試しに悪霊を追い出してみようではないか。そうしたらこれまで以上に悪霊を追い出す力が出てよりお金をもうけられるかもしれない」恐らくそんなやり取りが彼らの中であったのだと思います。彼らは13節にありますように「試みに」つまり、試しにイエス様の名前を使って悪霊を追い出そうとしたのです。「パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる」と悪霊を追い出そうとしたのです。いわば真似事です。彼らはイエス様を信じているわけではありません。イエス様みたいになりたいという思いから「イエスの名によって」と言ったのでもありません。あくまでも自分たちがお金儲けをしたいから、あるいは自分たちの名前を広めたい、有名になりたいとの思いもあったかもしれません。とにかく彼らはイエス様の名前を試しに使って真似事をしたのです。**

**そうやってイエス様の真似事をして悪霊を追い出そうとした祈祷師たちはどうなったかと言いますと、15節16節にありますように「悪霊は彼らに言い返した。「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ。」悪霊はこのように言い返して悪霊に取りつかれている男が祈祷師たちにとびかかってひどい目に遇わせて彼らは祈祷師たちは逃げ出したのです。**

**実はこのような祈祷師というのはこの使徒言行録の時代に初めて登場するのではありません。イエス様の時代にも同じような人たちがいたことをマルコによる福音書とルカによる福音書は伝えています。**

**マルコによる福音書9：38～です（80頁）。**

 **「9:38 ヨハネがイエスに言った。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようとしました。」**

**イエス様の名前を使って悪霊を追い出している者、まさにユダヤ人祭司長スケワの7人の息子たちと同じことをしています。イエス様の真似事です。弟子たちの真似事とも言えるでしょう。この人たちの動機はわかりませんが、恐らくはイエス様の名前を使ったらいつも以上に悪霊を追い出せるということに味を占めていたのでしょう。それで多くのお金を稼いでいたのかもしれません。**

**弟子たちはそんな猿真似をするような奴らは赦せないとばかりにやめさせようとしたというのです。しかし、イエス様は意外な反応をされました。**

**「9:39 イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。**

 **9:40 わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。」**

**意外にもイエス様は「やめさせてはならない」と言われたのです。その理由が「私の名前を使って奇跡を行っているその後で私の悪口は言えないだろう」、つまり「わたしの名前を使って悪霊を追い出す奇跡を行っている、真似事をしている奴らだけれども、わたしの名前を使っている限りわたしの悪口は言えないのだから、そのうちにもしかしたら信仰に導かれるかもしれない。だからほおって置け。あとは父なる神様にお任せせよ」というようなことを言われたということが記されているのです。**

**今日の使徒言行録のお話はイエス様の真似事をして悪霊を追い出そうとした祈祷師たちがひどい目に遇って終わりというお話ではありません。やはり悪いことをしてはいけないという教訓のお話ではないのです。この出来事が多くの人に知れ渡り、多くの人が恐れを抱き、イエス様の名前は大いに崇められるようになったのです。そして、ひどい目に遇った7人の祈祷師たちも悪行を告白して悔い改めてイエス様を信じる者へと導かれたのです。**

**マルコによる福音書とルカによる福音書にイエス様の真似をしてお名前を使って悪霊を追い出す人たちをイエス様が止めさせなかったことが記されていました。それはイエス様のお名前を使っているうちに信仰に導かれるかもしれないからです。この7人の祈祷師たちも悪霊からひどい目に遇わされましたが、信仰に導かれたのです。これもいわばイエス様の真似をしてイエス様の名前を使っているのをイエス様が止めさせなかったからと言えるのです。いわば偽物の信仰が本物の信仰へと導かれていったと言えるのです。真似は真似でも上達したいという動機の真似でもなければ動機も不純でやってることも決して褒められたものではない祈祷師たちですが、イエス様はそんな彼らを止めさせず、悔い改めへと導いて下さり本物の信仰へと導いて下さったのです。**

**本日の旧約聖書の箇所ではモーセが神様と語るためにシナイ山に登っていき、モーセの帰りを待ちきれないイスラエルの民がアロンに願って金の子牛を作らせてそれを神として拝んだことが記されています。偶像崇拝です。偽物の神の名を呼んで崇めたのです。当然神様はお怒りになりました。神でないものを神とし、その名を呼ぶそれは決して許されることではありません。**

**祈祷師たちはイエス様の名前を使って悪霊を負いだそうとしました。他の神の名前ではなく、イエス様の名前を呼んだのです。イエス様の名前を呼んでそれを自分のために利用しようという利己的なもので決して褒められたものではありませんが、それでもイエス様の名前を呼んだのです。真似事ではありましたが、イエス様の名前を呼ぶということをイエス様はお止めにならなかったのです。**

**考えてみれば私たちの教会生活も最初は真似事だったのではないでしょうか。教会に初めて導かれて礼拝に出席して、聖書の開き方も讃美歌の開き方もわかりません。周りの人の見よう見まねで聖書を開き、讃美歌を開いて歌ったのではないかと思います。主の祈りも信仰告白も意味も分からないけどこれまた見よう見まねで祈り告白してイエス様の名前を呼んだと思うのです。そして教会に通い続けてイエス様の名前をたとえわからなくても呼び続けたのです。「あなたは意味も分からず聖書を読んでいるし讃美歌を歌っているし主の祈りを祈って信仰告白を告白してイエス様の名前を意味も分からずに呼んでいる」と誰も咎める人も止めさせようとする人もいません。それは誰もが最初はそうだったからです。そうして教会に通い続けてイエス様の名前を呼び続ける中で、聖霊が働いて下さりイエス様の十字架の死によってこの私の罪が赦されたことに気づかされるのです。罪に気づき愛に気づき、イエス様の十字架の死と復活の恵みに感謝できるようになるのです。そうして最初は真似事だった教会生活が本物の信仰へと導かれていくのです。そして教会生活を送る中で「あの人のような信仰者になりたい」との思いが与えられて、その人の信仰の姿から「学ぶことは真似ること」をすることがあるのです。**

**先週、私が静岡教会で大変お世話になったある方が天に召されました。私が初めてお会いした時はすでにお年を召されていましたその方はいつも静かで謙遜で、そして穏やかに微笑んでおられるお方でした。その方の姿を見て私は「この方のような信仰者になりたいと」といつも思っていました。真似をしてもぜんぜん真似にもなりません。とてもとても足元には及びません。恐らく私の願いは叶わないと思いますが、今でも私の目標です。私はその方との出会いを与えてくださり、共に主を礼拝し、共にイエス様の名前を呼ぶことができたことを神様に感謝しています。**

**私たちが主の日ごとに礼拝をしてイエス様の名前を呼び続けることで、「この人のような信仰者になりたい」と私たちが思うと共に、もしかしたら私たちの姿を見て「この人のような信仰者になりたい」と思う人が与えられるかもしれません。そういう風にして信仰が後の世代へと受け継がれていくというのは素晴らしいことだと思います。イエス様のお名前を呼び、イエス様のお名前を褒め称えていきましょう。**